

お陰様で創刊100号、そして次へ

本誌は1993年5月28日の創刊以来、通巻で100号目を迎えた。季刊発行の時代から数えて今月号で満12年になる。創刊当時を考えれば、ここ数年の農政の大転換だけでなく社会一般や実業界の農業に対する注目や認識の変化には隔世の感を禁じえないものがある。

ここまで続けてこられたのはひとえに読者およびこの雑誌をご支援いただ皆様、そして広告主のお陰である。ここで改めての御礼を申し上げたい。

ところで、米の減反は1970年に始まつた。それから30年以上、農業界では「米を作れない」不幸を被害者意識で語り続けてきた。転作奨励金あるいは〇×考の枠組みを転換する必要があつたのだ。しかし、多くの農業にかかる者たちは安樂椅子に座り飽食を続けながら、「欠乏」の時代の論理を超えるようとはせず、それにすがつて自らの正当性や被害者の論理を主張し続けた。

「江刺の稻」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育つた稻。全く管理されていないこの稻が、手をかけて育てた畦の内側の稻より立派な成長を見せていく。「江刺の稻」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

あり、かつて国家や人々にとつての最大のテーマは飢餓の克服でありそれへの備えであつたのだから。

しかし、これまで何度も述べてきたが、

1960年代末に米の過剰が始まつただけではなく、国民一人当たりの消費カロリーが1971年を最高にしてそれ以降は減少しているのだ（国民栄養調査）。欠乏の社会が終わり、過剰の社会が始まっていたのである。農業界の論理の行き詰まりとは、この欠乏の論理を根拠にしてい

ることにあるのだ。

今から35年前、我々はパラダイム（思想）を転換する必要があつたの

ソビエト・ロシアを含む社会主義国家群の崩壊を見れば判る通り、自由な競争と市場機能による需給調整によらぬ経済は破綻するのだ。ソビエト社会とは欠乏を前提とした世界においてのみ通用した幻想なのである。

さらに、その延長線上にある「集落営農」という考え方がいまだに農業関係者の間で幅を利かせている。市場や顧客を意識した明確な経営主体が存在する場合の間で幅を利かせている。市場や顧客を転換を主張してきた人々だと思う。しかし、時代は変わった。過剰の社会、ボーダレスの世界の中で必要とされる次の知恵と倫理、それを可能にするより高いビジネスセンスが求められる時代なのである。

加算金が支払われるという根拠も突き詰めればそこに行き着く。

「市場の論理」あるいは「市場社会」という言葉や現実を忌避する感情がある。

農業政策の変更で補助金の貰い方を考

えるのではなく、そもそも思考の枠組みを転換させれば当たり前に見えてくる農業経営の今日と未来を考えていこう。

ところで、この雑誌は現在55歳の僕が中心になって作ってきた。読者もその世代が多い。読者の多くも農業界の中での農業改革に向けて取り組み、パラダイムの転換を主張してきた人々だと思う。しかし、時代は変わった。過剰の社会、ボーダレスの世界の中で必要とされる次の知恵と倫理、それを可能にするより高いビジネスセンスが求められる時代なのである。

本誌では、次号の101号目を期に見識を持つたより若い世代のスタッフが中

心になつて作る雑誌にしていきたいと思う。ご期待ください。

江刺の稻

「江刺の稻」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育つた稻。全く管理されていないこの稻が、手をかけて育てた畦の内側の稻より立派な成長を見せていく。「江刺の稻」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

史以来飢え続けてきた訳で

本誌編集長 昆吉則

ところである。なぜなら人は有

職業としての農業が語られる時代になつた。しかも、世界一の消費力を持つ日本の消費社会。成長するアジア。現代の日本ほど農業にチャンスが与えられている時代は無いと言つても言い過ぎではない。ただし、それは生産の視点、供給者の視点からではなく、顧客あるいは市場の要求や必要という視点を持つ者にのみ与えられるチャンスであり未来なのだ。そして、それは農業以外の世界では当たり前のことなのだ。

た。しかしながら、それは生産の視点、供給者の視点からではなく、顧客あるいは市場の要求や必要という視点を持つ者にのみ与えられるチャンスであり未来なのだ。そして、それは農業以外の世界ではあり、かつて国家や人々にとつての最大のテーマは飢餓の克服でありそれへの備えであつたのだから。

51 農業経営者 2004年5月号